

# The Gallery voice NO-64

編集・発行／ 画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 番地／TEL (098)888-6117 / 2021.11.27  
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan www.galleryokinawa.com

## — Roots —

照屋勇賢

画廊沖縄 40 周年の年に 4 回目となる個展をさせていただき、画廊 40 年の蓄積を共有させていただけることに心より光栄です。僕にとっての沖縄の展覧会への関わりあいは、外国や本土の展覧会とは全く違うものです。沖縄に生活している（いた）人達が作品作りの原動力だからです。そして画廊沖縄の展覧会作りの過程は、どの展覧会よりもより特別です。沖縄を思い、私達は、展覧会を見に来てくれる人、サポートしてくれる方々と一緒になって何ができるのかと、沖縄に必要な展覧会とは、画廊沖縄の図書室、オンラインで、頭をつつき合い議論を重ねます。僕にとって、画廊沖縄との展覧会作りは、沖縄の現在をみつめ、未来や自由を想像するプロジェクトなのです。

この展覧会「Roots」は、これまでの画廊沖縄との展覧会作りにおいて、発案されたアイデアやそれがベースになった様々なアイデアやその可能性を共有するドローイング展とも言えます。沖縄の歴史や伝統的な技法も、ドローイング形式に置き換えることで、主題への開拓と観察だけでなく、気づいた興味や発想と入れ替えてみたり、または問題解決の手段としてのプラットフォームとなっていきます。ドローイングはもっとも古い人類のコミュニケーション・ツール。人類の歴史でもっとも古い、洞窟に残された、動物達の表現や手形は、言語の原型であることを再確認し、現代の私達の使う言語へも、これからは新鮮な気づきを認識へと導く希望が、ドローイングにあると私は信じます。

僕は 1998 年、アメリカへ渡航して以来、アメリカとヨーロッパをベースにし現代美術を発表してきました。2018 年以降は、それまで活動してきたニューヨークからベルリンに拠点を移し、これまでとは異なった場所からの眼差しで沖縄を再認識しているように感じています。拠点をヨーロッパへ移し、琉球の文化、歴史と、ヨーロッパの歴史がつながる歴史的、美的価値観に共通のプラットフォームを創造する必要性を感じています。



ベルリンから見た 首里城消失は、コロナのパンデミック中、より象徴的に印象付けられました。急ぎすぎた人類のグローバル化への警告、そして地球温暖化へのまった無しの対策急務を突き付けられる中、失ってから気づく悲しさ、そして大切さがどんなものかを感じるきっかけになっています。同時に、これから再建する首里城の意義や、ともに生まれ育った私たちの伝統文化を再解釈する、私たちに与えられたチャンスだとも気付かせてくれます。

多くのアーティスト、周りのすべての存在も創作の原動力です。17 世紀オランダの静物画家、ラッヘル・ライスの油彩画や、ドラクロワ、ゴヤの歴史画はインスピレーションのもとになっています。金城明一氏の水彩画や油彩。去年、沖縄市で精力的に発表をした町田隼人氏のエネルギーからも刺激を得て今回に至っています。そして、この展覧会から次へ繋げてくれる観覧者、楽しみにしてくれるかたへの挑戦も含めてのコミュニケーションも、制作の大きな部分です。来場者によって画廊の外へと出て行く発想やお話し、または次に展示される場所でそのアイデアのメッセージがいろんなルーツにつながっていくことがこの展覧会の大きな願いです。

( 美術家 / てるや ゆうけん )

## すぶいの力

照屋久子

個展を開催する画廊沖縄のある南風原町は、勇賢の生まれた地でもある。その頃我家は丘の中腹にあり、周囲は草地在り、所々に高い木も茂って、白いアザミの花も咲いていた。幼い頃の勇賢は、バッタや蝶を追いかけて飽きることなく遊んでいた。憧れのウルトラマン、その脚本家として知られる金城哲夫さんのお宅も近くにあって。幼稚園の頃通学バックから毎日チリ紙（当時は板チリ紙）が無くなっている事に気が付き訳を聞くと、ヤギに食べさせていると言う。丘を下った途中で小屋がありその小屋に近づくとヤギがブロックの穴から顔を出した。私はヤギが腹を壊さなかったか心配になり、やっちはいけないと諭した。勇賢は動物には良く好かれていた。大人になるまで犬を飼っていたが、すべて本人の後ろからついて来た野良犬だった。老犬になると犬はいなくなり（当時は野外で放し飼いだっ）新しい犬がついてきて飼っていた。ある寒い冬の夜、アカ（犬の名）を家の土間に招き入れた。その夜勇賢がいびきをかいている。不思議に思い覗いてみるとアカが勇賢の布団に潜り込んでいびきをかいている。勇賢なら怒られることはないだろうと察していたようだ。



「mother」 水彩画・2021年

その頃勇賢の叔母が、近くの民家の間借り家で子ども達に絵を教えていたので通い始めた。画用紙を繋ぎ合わせて本人の等身大の絵を描いていた。楽しそうだった。小学生になると浦添の山城見信先生に教わった。那覇マラソンが始まった頃で子ども達に更紙を繋ぎ繋ぎさせて、大勢の走者を描かせ巻物にした。斬新でユニークな先生たちに恵まれたことが今に繋がっている。

東京で学生の頃、バイト先の事務所で個展をさせてくれるというので私は埼玉に出かけた。着いた頃はすでに暮れていて、薄暗い事務所の展示場に置かれていた大きな作品は、半立体の亀甲墓であった。墓の作品を置かれたオーナーは戸惑ったであろう。大学でも作品は評価されなかったようだ。私は奥原宗典の亀甲墓で埋め尽くされた墨絵と、佐喜眞美術館の威厳ある亀甲墓を思っ自信を持って欲しかった。そんな時期、帰郷すると直ぐに向かうのは県庁通りにあった「画廊沖縄」。郷土の作家だけではなく海外の作品が絶えず紹介され刺激と励みになったようであった。雑踏と騒音の東京での生活、その後の海外での生活は、沖縄への思いを深く強くさせ、それがバネとなって作品を作り続けている。特に若いころ通った山原の森への想いは強い。



「father」 水彩画・2021年

しかし沖縄の現実には悲惨だ。世界に誇れるサンゴの海が基地建設で埋められ、ノグチゲラや多くの生き物が生息する山原森の樹はオスプレイ用地建設で伐採されている。世界自然遺産の山は米軍の廃棄物で汚染されているも国は見ないふりをする。

そんな中、山原の自然と多くの生き物を守るために行動している秋乃さんが家宅捜索された。だが秋乃さんは諦めない笑顔で世界遺産の森から回収した米軍の廃棄物を持参展示して、沖縄の現状を訴え続けている。環境破壊で生存の危機が迫っている今、守るべきものは自然の中で生息している多くの生き物たちであることを、秋乃さんは確信している。それが人類の希望に繋がっているのだ。山原の沖縄の自然は世界に繋がっている。

先日オーナー上原氏の畑からすぶい（冬瓜）をいただいた。沖縄の畑からの贈り物であるゴーヤー、からし菜を食べて世界と繋がって元気に歩いて欲しい。  
（照屋勇賢母 / てるやひさこ）

## Conversation in Process

小嶺千尋



「THE FUTURE IS FEMAL」紙コラージュ・2021年

20年以上も沖縄を離れて、欧米から沖縄を眺め、沖縄を思い、沖縄人として表現していくことの意味や課題は何か。根気よく語り合い、会話をし続けることは思うより当たり前で簡単なことではないかもしれない。

私自身、大学卒業後生まれ育った沖縄を離れ、20代をアメリカとハワイで過ごした。私の場合は海外に拠点を置いたのは10年だったが、沖縄に帰ってきて自分の根っこ (roots) を沖縄の土地の中に再生させるのにさらに10年かかったと感じている。それは「西洋」または「ディアスポラ」という世界からホームランドに戻って、家族親戚との関係や、沖縄の土地や空気や水、言葉、そして沖縄社会や沖縄の学問との関係を再構築する過程だった。そしてその作業は今も進行中だ。

南風原津嘉山から東京、ニューヨーク、そしてドイツ。照屋勇賢さんはどこにいるのだろう？そういう漠然とした疑問があった。今回初めてお会いして、作品を見せてもらった。勇賢さんはホームランドとディアスポラの間、男と女の間、プロダクト (製品／商品) とアートの間、政治とアートの間、やまとうとうちなーの間、西洋とアジアの間、過去と今の間のリミナリティ (境界状態、規範からの逸脱といった中間領域を指す概念) に20年も居続けて、表現している、と感じた。

紙の着物 (沖縄語の「ちん」なのか、「kimono」なのか) の作品をよく見てみると、紅型の型紙のように貼り付けられている柄が着物自体から立体的にはみ出している。また、あるドローイング作品では、「じーしがーみ」(沖縄の骨壺) からカラフルな花木がはみ出して生えている。このような既存の社会における伝統や歴史、序列や地位や役割から「はみ出す」部分を、「見る側」としては見逃したくない。



「飛鳥に流水蛇籠葵菖蒲文様衣装」紙コラージュ・2021年

カッターナイフで線をなぞる手の動きが見えるような型紙の切り抜き、息遣いが聞こえるようなドローイングの線。完成した静的な作品からメッセージを受け取るというより、一つの作品の中で切り抜かれた部分の行き先を別の作品に見つけて答え合わせをしたくなる。線を描いたり、色をつけたり、型紙を切り抜いたり、貼り付けたりするプロセスそのものが勇賢さんの言語となり、遠い先祖や貝摺奉行と会話をしている。それはまた、実際今住んでいるドイツと沖縄を繋げる装置でもあり、それ自体が祈りでもあり癒しであるのかもしれない。展示会の空間を介して、その会話のプロセスを、見る側の私も一緒に追体験したように感じた。

展示にはないが、勇賢さんのお母様が画廊沖縄に差し入れたという、鮮やかなルビー色の酵素ハーブティが印象的だった。勇賢さんのことはまだよく知らないが、20年以上も、いつもは遠くにいる息子が沖縄に帰ることを待ちかかっている (待ち遠しく) する母心を勝手に想像しながら、少しだけ知り合いになれた気がした。多くの人に勇賢さんとの出会いと会話を展示会で体験してもらいたい。

(沖縄キリスト教学院大学准教授/こみねちひろ)



画廊沖繩にて制作する照屋・2021年11月

### Yuken がみつめる沖繩

田原美野

「雲」をモチーフとして選んだのは、偶然だろうか？展示空間にふわふわと漂う照屋の作品を眺めながらふと考えた。

「子どものころから、何かに対する怒りや、理由の分からない空虚感があった。」照屋が不意に口にした一言が気になった。その矛先や根源が、照屋個人の問題、あるいは思春期特有の誰にでもある、ある種の感情だったとしても、それとどのように付き合ってきたのかが、照屋の作品に通底する何かに思われた。そしてそれは、沖繩がこの半世紀、歩んできた歴史と、この地で生きてきた人々がすごしてきた時間に、共通する何かがあるような気がして、見過ごせなかったのである。

沖繩で作品を発表するのはいつも「悩ましい」と照屋は言う。おそらくそれは、照屋に限ったことではない。この島がたどって来た歴史や、過去から今に続く事柄の多くが複雑で、簡単に解決や協調を見いだせないことを意味している。照屋がアーティストとして活動を始める 2000 年代初期に発表された「結い-YOU I」は沖繩の伝統的な染織技法である紅型をベースに、照屋がデザインし、職人の手によって染められた作品である。一見すると美しいその着物には、目を凝らすと沖繩の重い現実が描かれる。鮮やかで豊かな「色彩」と躍動的な「型」のリズムが、古典紅型の調和を守り、全体的なバランスを保っているものの、沖繩に住む当事者として、巧みなトリックにかかってしまった後味の悪さが残る。しかし同時に、私たちが生きているこの島には、現実を凌駕する程のつよい「美」の存在があるのだと、認識させてくれる。

### THE Gallery Voice No-64.2021.11.27 画廊沖繩

今展を開催するにあたり、この地が抱える問題や課題についてよく話し合った。また、照屋の住むベルリンの地で感じたことを直接聞くことができる貴重な時間でもあった。それは展覧会を共に作っていく上で、欠かすことのできない作業なのだが、加えて、それぞれの中に残る、あるいは居続ける「沖繩」という Roots を確認する旅のようでもあった。しかし、20 年以上も故郷を離れ、アーティストとして遠くアメリカ N.Y. をはじめ、ヨーロッパを主戦場にしてきた照屋にとって、沖繩を考え続けることは容易では無かったはずである。「勇賢さんのアイデアが溢れるような空間を創りたい。そのアイデアが、沖繩が未来を想像できるヒントになるかもしれないから。」私が投げたボールに対し、打ち返されるボールは、常に予想もしないような変化球だった。

照屋がドイツから持ってきたドローイングには、バルーンになったじーしがーみ（厨子甕）が描かれ、鮮やかな生花は、うやふあーふじ（ご先祖様）の声を聞くようである。魔よけであるはずのシーサーは、憎めない表情でブーケをもって迎え入れる。正面を向いた龍柱ゲートは、首里城ランドへの入り口のようで、楽しい。照屋特有のユーモアとアイデアが、可笑しさを誘う。雲形に切り抜き、切り抜かれた沖繩の雲は、照屋が日常目にするドイツの新聞記事や、優雅で誇り高さ西洋の「美」の上を通過する。さらに雲は、高級ブランドの紙袋から飛び出し、上空を悠々と旋回する。「our house」と名付けられた雲たちは、個々が絶妙な関係を保ちながらも、自由に遊ぶ。

沖繩の厳しい現実を前に、離れた場所からアイデアを差し出し、その地に生きる人々と共有することは、照屋に課せられた役割の一つかもしれない。そしてその過程が、沖繩の未来を豊かに、自由に想像する上で、重要な要素の一つだと考える。厳しい夏の日差しをやわらげ、影を作る雲、あるいは恵みの雨をもたらす、大地を潤す雲のモチーフは、これからの 50 年を描く私たちに、必要なものなのかもしれない。

(画廊沖繩スタッフ/たはらみの)

#### 【照屋勇賢 略歴】

- 1973 年 南風原町生まれ
- 1996 年 多摩美術大学油彩科卒業（東京）
- 2001 年 スクール・オブ・ビジュアル・アーツ MFA 修了以降 2002 年から、海外国内で多数の個展、グループ展に参加
- 2009 年 — CUT — (画廊沖繩)
- 2012 年 — I have a dream — (画廊沖繩)
- 2017 年 — 遙か遠くからのパレード — (画廊沖繩)
- 2021 年 — Roots — (画廊沖繩) \* 現ベルリン在